

## 私の授業： 参加型を目指して

茂呂雄二

人間総合科学研究科助教授

### 学習論の変化

この小論では、最近の学習心理学における学習観の変化と、それをもとにした、私の担当する教職科目の『教育心理学』における試みについて紹介します。

人間の学びのプロセスはどのようにとらえるのかに関わる、学習観は、近年大きく変化しつつあります。青山学院大学の佐伯眸さんは、「できる」－「わかる」－「参加する」という図式で、学習観の変遷を表現しています。

「できる」というのは、いわゆる行動主義心理学の学習観で、餌や報酬を用いて動物に繰り返し訓練する場面が典型となります。「できる」学習観は、20世紀の初めから根強く支持されている見方であり、実際にも学習の基本的な部分をカバーする見方です。しかしあくまで、個体（個人）をユニットにしたもので、繰り返し訓練の結果だけに注目するという限定されたものであること

を覚えておく必要があります。

「わかる」は、1950年代の認知革命を背景に出てきた考え方です。ただ単にできるのではなく、できること背景にある、人間の知的過程とくに積極的に世界の不思議に向かう理解過程を重視しました。しかし、この考え方もあくまで個人を単位とする、狭い見方と言う必要があります。わかることがなぜ重要なのかを決めるのは、あくまでも社会文化的な状況であり、わかることはその状況に支えられてはじめて意味を持つからです。

### 参加

この見方が近年の多くの研究者、実践家をとらえ始めつつある学習観です。学びは日常生活のいたるところに見られる、そもそも社会的なプロセスです。学習する仲間に加わり、そのコミュニティの一員となり、先輩に育てられつつ、新人の面倒を見

る。コミュニティーは持続され再生産されますが、ときには内部の軋轢が表面化して、メンバー間の相互行為が活発化して、コミュニティーの在り方そのものが変更される場合もあります。

学習とは「できる」「わかる」などの個人の変化を超えたものなのです。できる、わかるも大事ですが、学習は個人をふくむコミュニティーの変化なのだ、と新しい学習論は教えてくれます。

この考え方の利点は、学校の特異性と限界を理解させてくれることにあります。「できる」「わかる」も学校での出来事に深く根差しています。個人の変化に焦点化して、個人の変化を測定可能にする学校という社会文化的制度と、 관련된学習観なのです。私たちの無意識にまで食い込んだために、その相関はほとんど意識されません。現実の学びは学校から現場への動きなどのコミュニティー間の移動が重要ですし、先に述べたようにコミュニティーそのものの変革にもつながるものです。さらには学習者はコミュニティーの内部や狭間で自己のポジションを確立する、いわゆるアイデンティティーが重要です。

参加の視点は、学習を狭い学校から、社会文化的な場所に開くという作用をもちます。学校と現場をつなぐという意味でも、学校に特殊な学習に対するアルタナティブ

を構想するという意味でも、参加の視点は貴重です。

### 美的なものの再デザイン

ところで2002年の夏にたいへん面白い経験をしました。岐阜の知り合いの幼稚園、揖斐幼稚園で行われたアートワークショップに参加したのです。これは美術家である東京芸大の川俣正さんによるワークショップでした。川俣さんとゼミの学生、幼稚園児年長さん、園のスタッフ、園児の父兄が参加して、園庭のすみに“秘密基地”とよばれる木製の構造物を制作して、そこを子どもたちと学生が制作した、たくさんの絵や造形物でかざるといって、1週間のワークショップでした。

揖斐ワークショップでは、子どもたちが、学生をリーダーとした少人数グループに別れ、話し合い、絵を描き、模型を作りながら、秘密基地のイメージを重ねていきます。そのイメージを、父兄を交えた大人たちが、船のデッキのような構造物、そこに上がるための橋、基地に通じるトンネルなどを、木材で実現しました。

川俣さんの「美」に関する考え方は、近年の学習論を参照すると、非常に興味深いものに映ります。美的なもの、あるいは美的な感性とは、作品の内部に閉じ込められたものでも、作品を制作したり観賞する個

人の内部には無いと主張します。美的なもの、むしろプロセスであるとされます。さまざまな人々の参加が作りだす、共同行為の過程そのものだとされます。つまりは美的なものの創造過程は、社会的で文化的な学習過程に等しいとされるのです。

掛斐ワークショップでは、双方向的な学びが成立しました。子どもたちは、そのような大きなもの作りの過程に関わることはもちろん、保育者以外の大人との1週間におよび作業も始めての経験でした。美術家も美術学生も子どもと制作するのははじめてでの経験でした。参加者の相互構築過程を美と等値する川俣さんの考え方は、現代の学習心理学に合致するプロジェクトだといえます。

### 授業の参加型デザイン

大学の授業も、すべてとは言いませんが、このような参加型のプロジェクトに再デザインすることはできないでしょうか。私が、参加型として再デザインしたい理由というのは、以前経験した3学期のテスト後の教室の風景にあります。

私は教職科目の「教育心理学」を担当していますが、以前、客観テストで、学生の達成を評価していた時期があります。テストの終了後、学生の帰った教室で、答案用紙を学籍番号順に並べ終えたときです。教

室の後ろのドアから出ようと、階段教室を昇っていくと、座席に忘れられた「教育心理学」の教科書に気づきました。教卓の上にも置いておこうと拾い上げたのですが、他にも同じ教科書がたくさん忘れられていました。都合7,8冊を回収しました。これは忘れ物ではなく、棄ててあったのです。これには、驚きました。

このことは、学生の受講と期末試験の受験の意味が相当に狭くなっていることを意味します。私の研究室の韓国からの留学生パク・ドンソップさんは、学習活動の目標や状況の意味が複数有り、ときには学習者とインストラクターの間で食い違うことに注目して、それを学習「状況の定義」の問題として議論しています。パクさんの議論を借りれば、私自身の状況の定義と、その時の受講者の状況の定義には、ずれがあったことを意味します。

当時の受講者のなかには、テストの通過や単位取得といった、目の前の短期的目標に基づいて、状況の定義を行なったものが少なくなかったといえます。単位を計画的に取得することも重要ですが、それだけでは教職科目の目標としては不十分に思います。実際に教壇に立つことを考えると、参加としての学習にともなう学びの意味を考えて欲しいと思うようになりました。

## 教育心理学の再デザイン

何とか、日常生活での学びのような参加を授業に加味したい。現在、試みているのは、グループによる作品作りのプロセスへの参加を加味するという試みです。2003年度の事例を紹介します。

教職科目としての教育心理学は、児童や生徒の発達や学習に関する一定の理解をうることが目標となっています。そこで、1学期は児童・生徒の発達過程、2学期は学習をテーマに講義します。3学期は、5人を単位にグループを作って、作品をまとめる学期としています。作品のテーマは「筑波大学での学びの問題点と改善策」であり、これをレポートにまとめることを求めます。授業で解説した、発達過程に関する用語や、学習の意欲や動機づけなど、教育心理学的な概念を使って、筑波での具体的な問題を取り上げ、それを議論するという課題です。

1学期、2学期も、その下地となるようなレポート課題を出します。1学期は「高校と大学の学びの違い」、2学期は「大学の学びの問題」です。

3学期の授業ですが、グループ分け、グループ単位でのブレインストーミング(上記の課題について、100個のアイディを出し合う)、KJ法を用いての討論とテーマを集約、中間発表、テーマを一枚の図に表現、関連する文献やデータの調査、一人3冊の読書、

文章化、発表といった単元構成で、授業を進めます。

## 評価

学生たちが取り上げたテーマは「専攻決定」や「大学の施設」など身近なテーマから「大学における英語教育」「筑波大芸術専門学群と私立美大」など他大学との比較をしたもの「知的好奇心」や「寝ていられない授業の提案」など授業改善をテーマにしたものなど多岐にわたりました。

「大学教育におけるコミュニケーションの重要性」を取り上げたグループがあります。大学改革に関する出版物では「専門性」「訓練」など提案されていますが、独自に行なったアンケートからは、むしろ学生がコミュニケーションを求めていることを明らかにしました。教員とのコミュニケーション、授業におけるコミュニケーション、大学間コミュニケーションなど、複数のレベルを議論して、具体的な提案もしてくれました。

このグループのレポートは相当に読みごたえのあるもので、私自身も考えさせられました。もちろんおざなりなものもあり、インターネットの情報の切り張りですましたものも見受けられます。

発表時やレポートに書かれた感想から学生の満足度としてはある程度の評価をえら

れたと思いますが、改善すべき点も少なくありません。この授業は180人ほどの受講者があるために、途中や最終の発表は一部の学生に限らざるを得ませんし、テーマの制限を設けなかったためにかなり拡散してしまいました。ただし、これらのレポートは後輩への貴重なメッセージであり、今年の授業の資源として利用できそうです。

(もろ ゆうじ／教育心理学・言語心理学)